

ひとまちも元気になる 女性が主役の地域づくり

あなたが住むまちは今、暮らしやすいですか。子育ての支援、高齢者の生きがいづくり、環境の保全、安心・安全のまちづくり、地域経済の活性化……地域には解決しなければならない課題がいっぱいです。そうした現状を自分たちの手で変えようと、立ち上がった行動する女性たちが増えてきました。今後、みんなが幸せを実感できるまちをつくるには、男女の両方の視点から地域を見直していく必要があります。国の男女共同参画基本計画(第2次)でも、新たに取り組むべき分野として、「地域おこし、まちづくり、観光」が位置づけられています。今回の特集は、女性が主役となって地域づくりに挑み、そこに住む人とまちを元気にしてきた事例を紹介します。あなたも自分の地域で、何かを始めてみませんか？

男女共同参画基本計画(第2次)における地域づくりの取り組み

平成17年12月 閣議決定

「地域おこし、まちづくり、観光」について、政策・方針を決める過程に女性の参画を広げる。地域おこしに関する自主的学習グループに支援するなど、男性・女性両方が地域づくりについて学ぶ機会を確保する。女性が参画した地域づくりの優良事例を普及したり、コーディネーターを派遣するなど、各地の自主的な取り組みを支援する。

観光

歓楽街のイメージを変え、魅力ある温泉地として再生

雄琴温泉観光協会理事「湯くわくわくキャンペーン実行委員会」委員長
佐藤祐子さん(大津市)

雄琴温泉の老舗旅館の後継者、佐藤さん。「雄琴」歓楽街のイメージを変えたいと、他の旅館の若手経営者たちとともにイメージアップ戦略を展開。個人客や家族客が訪れる人気の温泉地に生まれ変わりました。

琵琶湖を望む景勝地として知られ、大正時代から観光客でにぎわってきた雄琴温泉。ところが、1970年代、近くに風俗店が建ち並ぶようになってイメージが悪化します。客足が低迷する状況を見て、佐藤さんは10年前、旅館の若手経営者6人で「湯くわくわくキャンぺン実行委員会」を結成。歓楽街のイメージを変え、往時のにぎわいを取り戻そうと、温泉のPR活動を始めました。

「お金もないし、知恵もない。でも、若さと体力と時間がありました」。手探りで観光業者やマスコミ各社を訪ねて、京阪神からすぐ足を延ばせる由緒深い温泉地という魅力アピール。マスコットキャラクター「おごん」も作り、キャラクターグッズを活用して、京阪神と東京のJR各駅でキャンペーンを展開しました。また、環境に関する国際規格ISO14001の取得

(4旅館)や、「雄琴温泉」を地域ブランドとして商標登録するなどの先進的な取り組みも。

PR活動と同時に、各旅館では設備投資をして、露天風呂付きの客室を作るなどの改装を行いました。こうした努力が実り、女性の個人客や家族客、修学旅行生の集客に成功。リピーターも年々増え、ホテル・旅館業界全体の業績が落ち込んでいる中で、毎年、前年度並み以上の実績を保ち続けています。

昨年は、最寄りの雄琴駅が「おごと温泉」駅に改称されることが決まり、「この10年で、魅力ある温泉地というイメージが着実に広がってきま

した。今後、地域の人たちに雄琴温泉を財産と想っていただけるよう、地元の若い世代とともに新しいまちづくりを考えていきたい」と、佐藤さんは目を輝かせます。



マスコットキャラクター「おごん」



「おごん」を活用して行った観光キャンペーン

琵琶湖にたたずむ雄琴温泉街
写真提供：大津市

地域の親子とともに 支え合いの輪を広げる

NPO法人 元気づずみオー ファミリーセンターげんき 代表
太田加奈子さん(草津市)

地域の課題を解決する起業スタイル、コミュニケーションビジネスが注目されています。草津市の母親たちの声にこたえて、「親子の居場所」を立ち上げた太田さん。子ども

もを中心にした支え合いの輪が、地域に広がっています。

「身近に子どもの遊び場がない」「育児に困っても相談できる人がいない」。3年前、保育士を退職してから育児サークルを主宰していた太田さんは、母親たちのそんな悩みを耳にしました。核家族や、転勤で引っ越してきた家族が多く、地域のつながりが薄い草津市。子育て中にいざという時、頼れる人や場所がないという課題に気づきました。



そこで、「親子が集まって交流できる拠点がほしい」という思いが湧きました。

と私たちも。見よう見まねで企画書を作り、協力者を求めて企業を回りまわした。そんな中、子どもたちのサッカークラブを作ろうとしていた企業経営者と出会い、意気投合。ともに、NPO法人「元気づずみオー」を立ち上げ、南草津のビルを借りて、「ファミリーセンターげんき」を開設しました。



センターでは、0歳から就園前までの子どもたちの育児サークルを会費制で催すほか、自由に遊べるスペースを地域の親子に無料開放。運営を手伝うのは、ボランティアの母親たちです。

「子育て中でも、何かをしたいというパワフルなお母さんたちが集まりました」。そこから、料理が得意な人が料理教室を開いたり、子育ての先輩が赤ちゃんの育て方を教えたりと、おたがいに特技を発揮する「チャレンジ教室」が誕生。母親の自己実現と交流の場へと活動が広がってきました。

「ひとりのお母さんが、ほかのお母さんたちのために立ち上がって行動する。その温かい気持ち、次のお母さんへとバトンタッチされていく。子どもたちもその姿を見て育ちます。そんな支え合いの輪が広がっていくれば、社会はもっと優しくなるはずですよ」と、太田さんは熱い思いを語ります。

ネットワークの力で 湖北の伝統食を普及

ピクルスミセス

三姉妹本舗
代表・田辺八重子さん(虎姫町)

筑摩赤丸生唐グループ
代表・真野たか子さん(米原市)

甲津原漬物加工部
代表・山崎トミ子さん(米原市)

上板並漬物加工組合
代表・草野久江さん(米原市)

高月有機栽培グループ
代表・阿閉幸子さん(高月町)

湖北の7つの農村女性起業グループが手を結んだネットワーク組織、ピクルスミセス。女性の社会進出が遅れていた農村社会におい

て、女性の精神的・経済的自立を実現し、地域の伝統食を幅広く市場に普及させてきました。

ピクルスミセスのメンバーは、地域でとれる農産物を漬物、総菜、菓子などに加工して販売する女性起業家たち。素材には、米原の赤カブ、高月の丸ナス、甲津原のミョウガなど、地場の特産物を使用。製法も、白菜の葉を一枚一枚重ねて漬ける「たたみ漬け」など、昔ながらの手間のかかるやり方にこだわっています。そこには、「地域の伝統食を伝えたい」という共通の思いがあります。

しかし、一人ひとりの力では、なかなか販路を広げることができません。そこで、販売の拡大

と情報発信力の強化をめざして、1997年、ピクルスミセスを結成したのです。

メンバーは、ネットワークの強みを生かし、商品開発の情報を交換したり、品質管理技術の研修を開催したり、おたがいに切磋琢磨しながらレベルアップを図ってきました。イベントにも共同で出店して、湖北の食を全員でPR。そうした取り組みの結果、新たな委託販売先からの引き合いが増え、直接注文で購入してくれる固定ファンも獲得しました。

さらに大きな意味があったのは、湖北の農村社会で、女性の自立の道を切り開いたこと。ピクルスミセス結成のころは、女性の起業に批判的な眼を向ける人もいましたが、メンバーが実績を上げるのを見て、地域の人々の意識も変わりました。ピクルスミセスの活



躍に刺激されて、新たに起業するグループも現れ、後へ続く女性たちの先進モデルとなっています。

茄子の里

高月有機栽培グループ



どんぐり会



どんぐり会

提言

老いも若きも男性も女性も、
誰もが主役になる地域づくりを

今後、地域づくりへの女性の参画を進めていくには、どんなことが必要？ 滋賀県を中心に長年、まちづくりの助言・研究活動に取り組んでいる織田直文さんに聞きました。

女性の持つ特質が今、求められている

最近、地域づくりの場面で、女性が目覚ましく活躍しています。注目を集めるNPOやコミュニティビジネスの分野のリーダーの多くは女性です。地域の課題が多様化・複雑化・深刻化する中で、それに応えなければいけないと気づいた感性の鋭い女性たちがリーダーになってきているのです。

人々の価値観の変化や社会・文化の変化に、男性文化ではもはや対応しきれません。一般に企業・仕事中心で生きてきた男性に比べて、地域に密着して生きてきた女性は、地域の情報を豊富に持っていますし、上意下達のピラミッド型ではなく、水平方向のネット

ワーク型の人間関係を得意としています。こうした女性が持つ特質が今、地域づくりにおいて求められているといえるでしょう。

男女の意識の差は依然として大きい

しかし、地域づくりへの女性の参画を進めるには、課題もたくさんあります。最も大きいのは、男性の意識変革ができていないことです。これだけ男女共同参画社会の意義が叫ばれていても、依然として男女の意識には差があります。たとえば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、昭和40年代には男女とも賛成する人が大半でしたが、今や女性は反対意見が多いのに対して、男性は賛成の方が多く内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査(平成19年)」こうしたギャップを考えれば、まだまだ女性の社会参画はしにくく、活動するうえで必要以上に世間体を気にしなければいけないというのが実情です。また、その価値観や生き方が多様で

あるため、しばしば女性どうしても対立が起ってしまうことや、女性が潜在能力や意欲を持っていても、それを伸ばす機会が少ないことも課題として挙げられます。

高齢者や青少年にも参加してもらう機会を

今後に向けて必要なのは、女性だけをクローズアップするのではなく、誰もがまちづくりの主役になり得る社会風土をつくっていくことだと思います。女性はもちろんのこと、定年を迎えている団塊の世代を含めた高齢者や、高校生・大学生を含む青少年にも、まちづくりを学び、参加してもらう機会を多様につくっていくべきでしょう。

老いも若きも男性も女性も、みんなが力を合わせて取り組む中でこそ、女性の持つ特質が発揮され、活動しやすくなるのです。



京都橘大学文化政策学部教授
おだ なおふみ
織田直文さん

【プロフィール】 1952年石川県生まれ。福井大学工学部卒業。京都大学博士(工学)。財団法人滋賀総合研究所主任研究員、滋賀文化短期大学生生活文化学科教授などを経て、2001年4月より現職。臨床医学にならって地域診断と課題解決を行う「臨地まちづくり学」を提唱。

図書・資料室から

地域づくりのヒントをもっと知るための本

『いま、地域の自立を考える』
井ノ下 猛/著
地方自治研究会/発行 (2005年)
誰もが生きている地域社会。底力のある地域を創るのに必要なものは？ 地域自立の方策と展望を描く。

『元気なまちの「スゴイしかけ」』
佐々木陽一/編
PHP研究所/発行 (2006年)
地域経済を活性化するための事例は、まちを変えたサクセスストーリー。あなたも元気に変わる！

『参画と協働 理論と実践』
兵庫大学附属総合科学研究センター/編 神戸新聞総合出版センター/発行 (2006年)
阪神・淡路大震災の経験から、兵庫県民と県行政は参画と協働をどう進めたのか。兵庫の事例をたどり振り返る。

『女性の「仕事おこし、まちづくり」』
上野勝代他/著
学芸出版社/発行 (2000年)
自然食利用のお弁当屋さん、旧愛宕町マカレットステーションなど、日本の各地でいきいきと「こ」を始めた女性たち。

『女性のための草の根まちづくり』
ノルウェー環境省/編
かもがわ出版/発行 (1999年)
世界で一番男女平等が進んでいる国ノルウェー。そのノルウェーの女性参画を進めるためのプロジェクトとは。料理の手順を示すように細かく紹介。

『地域づくりワークショップ入門』
傘木宏夫/著
自治体研究社/発行 (2004年)
住民参加のまちづくりを進めるには？ そのノウハウが明かされる。

この他にも、家族・健康・子育て・仕事・生活・高齢社会など、約6万冊の本がそろっています

〔貸し出し〕
本は1人5冊まで(3週間)
ビデオは1人2本まで(1週間)

〔休室日〕
月曜日・祝休日の翌日・
年末年始・施設点検日・図書整理日

・DV(配偶者や恋人からの暴力)
・セクシュアル・ハラスメント
・夫婦関係
・家族関係
・「女(男)だから」「女(男)のくせに」と差別された
「あなたの悩みをいっしょに考えます」

相談専用電話
ミナ ハナサク
0748-37-8739
総合相談(電話・面接)
火・水・金・土・日曜日
9:00~12:00 13:00~17:00
木曜日
9:00~12:00 17:00~20:30

男女共同参画相談室から

カウンセラーのつぶやき

日々の相談の中で思っている、感じている

男女共同参画相談室では、性別による差別的取り扱いや男女共同参画の推進を阻害することに関する相談を県民の皆さんからお受けしています。

さて、今回の情報誌のテーマである「まちづくり」とは、誰にとっても、良いまち・住みよいまちをつくることであり、そのためには住民が主体となっており、参加することが必要だと思われれます。しかし、現実の社会ではどうでしょうか。自治会等の地域の話し合いの場で男性も女性も同等の立場で意見を出し合っている、男性と女性の両方の視点に立って地域活動が行われているでしょうか。役員は男性が多数を占めていたり、女性は人前で意見を発言するのはどうか

と遠慮がちになつたりしてはいないでしょうか。

私たちがお受けするご相談の多くは、夫婦・親子・家族の人間関係に関する悩みです。ケースは様々ですが、「自分の思いをどう伝えるか、また相手の考えをどう受け止めるか」が、それらの問題を解決に導く鍵であると私たちは感じています。そして、この視点は家庭のみならず、「まちづくり」にも通じていると思います。男女に関わらず、よりよい生き方について自分の思いを口に、相手の意見に耳を傾けることにより、まずは家庭が、そして地域が、まちが、そして誰もが生きる、良いまち・住みよいまちになれば素晴らしいと思います。